

I P U M A G

地域とともに未来をデザインするマガジン Vol. 52
2012 Summer

Iwate Prefectural University
Magazine

【特集1】

被災地のために 今、私たちが できることは？

看護学部 カッキー's の支援活動



【特集2】

岩手県立大学が 取り組む 「災害復興教育」

IPU-研究室へようこそ!

IPU TOPICS

地域をつくる希望の星たち

アイーナで学ぼう!



被災者のために今、私たちができることは？ 学生の発想と行動力で、 被災者に寄り添う支援を。



震災発生直後から、教員を中心として様々な支援活動を行ってきた看護学部。昨年11月には、学生有志によるボランティアチームが発足しました。チーム名は、支援先の山田町のカキにちなんで「カツキース」。



地域で保健師として活動する先輩と連携しながら住民の健康維持の手助けをしています。

大学での学びを支援に生かし、活動を通して自分自身を成長させる。

3年生を中心とした有志でつくる「カツキース」は、毎月1回、山田町の仮設住宅で支援活動を行っています。昨年の岩手看護学会で、山田町の保健師をしている本学卒業生の尾無徹さんが、ボランティア不足を訴えたのが発足のきっかけでした。「支援活動をした」という学生の想いを形にしたいと考えていた井上 都之講師は、尾無さんと相談。心や健康のサポートをするサロン活動をしてほしいという意向を受け、学生によるボランティアチームを立ち上げたのです。

学生が訪問する仮設住宅には、様々な地区の住民がバラバラに入

住民の健康を支えながら地域と連携した活動へ。

サロンでは、交流を深める遊びのメニューに加え、マッサージや血圧測定なども行い、住民の体調管理の役割も担っています。しかし住民から「もっとサロンの質を上げて、健康に役立つものを取り入れてほしい」という要望が上がリ、メニューを見直すことに。大学での学びを生かして

看護学部ならではの支援で長期的に被災地を支える。

震災の直後から、看護学部では様々な支援活動を展開。被災地では、被災者の心と健康の調査、女性健康相談、傾聴、指圧やマッサージなどを実施。一方、内陸部では避難住民に対する母子支援や学生ボランティアによる支援活動などを行っていました。そして現在は、学生による「カツキース」の活動を含め、継続的な支援を展開しています。

「学生を支える先輩からのメッセージ」

山田町保健師 尾無 徹

自分自身も被災した経験から、保健師という立場を離れたひとりの人間として、町の役に立ちたい。そんな思いで学生と被災地をつなぐボランティアを始めました。活動にあたって考えたのは、両者の関係を「暖かい」として、被災者の心と健康の調査、女性健康相談、傾聴、指圧やマッサージなどを実施。一方、内陸部では避難住民に対する母子支援や学生ボランティアによる支援活動などを行っていました。そして現在は、学生による「カツキース」の活動を含め、継続的な支援を展開しています。



「大事なのは継続して訪問すること。それが被災者へのメッセージになります。」と話す、尾無さん。

看護学部の支援活動について



看護学部の支援活動が、平成23年度版「東日本大震災復興支援活動報告書」として、一冊にまとまりました。それぞれの活動に携わった教員の手で、震災発生から約一年の活動記録が掲載されていますので、ご覧ください。報告書は岩手県立大学図書館で閲覧できます。



- 1 「カツキース」のサロンでは、毎回、血圧測定を行い、住民の体調をチェック。何気ない会話の中から住民の変化に気づくこともある。
- 2 取材した日は、サロンで高血圧講座を開催。自分たちなりに勉強を重ね、資料を準備した甲斐もあって、住民に好評だった。
- 3 肩をマッサージしながらおしゃべりする学生と住民。このひと時を楽しみにしている住民も多いという。
- 4 取材した日は、サロンで高血圧講座を開催。自分たちなりに勉強を重ね、資料を準備した甲斐もあって、住民に好評だった。
- 5 昨年の12月のサロンでは、クリスマス会を開催。2つの集会所には60名を超える住民が集まり、おおいに賑わった。
- 6 住民の要望に応じて、1月には餅つきを行い、新年を祝った。一人暮らしの住民も多いため、季節の行事は大切な交流の場。
- 7 高血圧講座の際に学生が手づくりしたプリントを配布。注意などがわかりやすくまとめられている。

サロンと同時進行で行う、仮設住宅への家庭訪問。サロン等へ参加していない方ともコミュニケーションをとっている。



被災地のために今、私たちができることは？

今回の特集テーマに関するアイデアをtwitterで募集したところ、被災地との付き合い方や具体的な企画、アクションなどこれから実行していきたい支援の提案がたくさん寄せられました。その中から、いくつかのご意見をご紹介します。



「IPU-研究室」へようこそ！

岩手県立大学は、地域のシンクタンク。学内では日々、様々な研究や教育活動が行われています。こちらでは、大学全体を大きな研究室にみたくて様々な研究教育活動をご紹介します。



◎研究室プロフィール
総合政策的な見地から地域活性化や地域医療などのテーマに取り組む、栗田但馬教授。「地域の活性化は生活、生産すべてが一体化して発展すべき」と、徹底した現場主義を貫き、学生のゼミ、実習でも現地の調査活動を重視。雫石軽トラ市の運営補助・調査・出店、西和賀湯本活性化プロジェクト、地域医療の課題分析などに取り組んでいる。

- 【研究メンバー】
- 栗田但馬 (総合政策学部・准教授・中央)
 - 兼平 彩夏 (総合政策学部4年)
 - 菅野 龍 (総合政策学部4年)
 - 八重樫美咲 (総合政策学部4年)
 - 熊谷 雄貴 (総合政策学部4年)
 - 片見 祐祐 (総合政策学部3年)
 - 今 愛理香 (総合政策学部4年)
 - 青 笹 諒 (総合政策学部3年)
 - 佐々木沙織 (総合政策学部4年)
- ※学生氏名は向かって左から順に記載。

今回の研究テーマ 地域課題の解決に向けた総合政策的アプローチ [栗田但馬研究室]

地域の「くらし」「しごと」すべてを総合的にとらえ、温泉街を活性化。

温泉を中心産業とする湯本地区は、かつては多くの湯治客にぎわった温泉街。しかし近年はその面影を失い、衰退の一途を辿っていました。栗田但馬准教授研究室では、西和賀町の調査をきっかけに、平成21年から湯本活性化プロジェクトに参加しています。まず、地域の課題を共有するために、月1回ペースで住民とワークショップを開催。しかし最初の頃は住民の参加は少数で、問題から目をそむける人が多かったといいます。それでも回を重ねるうちに、自主的に活動に取り組むまでに意識が変化。観光イベントも成功させ、住民たちは継続的に様々な課題に取り組んでいます。「観光だけを改善してもダメ。暮らし、仕事の全てを一体化して、発展させることが大切です」と、栗田准教授は強調します。



平成24年2月19日岩手県立大学総合政策学部主催「防災・復興研究会第一回公開フォーラム」での研究発表

地域医療の課題を抽出し、向かうべき方向性を指し示す。

広大な農山村地域を有する岩手県は、その地域性から全国で最も県立病院の比重が高いエリアです。しかし国の政策に伴って県は、経営第一主義に重点を置き、病院の統廃合、大幅な病床縮減を実施。さらに震災によって甚大な被害を受けた沿岸地域では、今後の病院再建の方向性が議論されています。栗田准教授は県内の県立病院や、先進モデルである沢内病院・藤沢町民病院などの調査から、地域医療の課題を抽出し、「住民不在」の医療改革を問題視。「県民のための医療」という原点に立ち返り、医師・行政・住民の連携の重要性や、農山村地域の特性に合った保健・医療・福祉の総合化の促進など、岩手独自の医療モデルの提案を行っています。



湯本活性化プロジェクトでは地区住民と何度もワークショップを行い課題を共有しながら解決の糸口を探った。

「西和賀町社会経済調査報告書」は本学図書館で閲覧できます。
「岩手県における農山村地域の保健・医療・福祉（介護）に関する総合的な連携実施事業報告書」は学部HPからご覧いただけます。
総合政策学部 <http://www.poly.iwate-pu.ac.jp/>



「また、あのの人に会いに行く」東北へ足を運ぶ事で現地にお金を落とす。動機はボランティア活動で出会った「あの人」に会いたいからでも良い。あの人の笑顔が見たい、またあの人とお話がしたい。難しい事じゃない、だって会いたいあの人の人だから。これからずっと続けていこうと思っています。@ta_mina #1130Kimura

震災以降、食材を買う時はなるべく被災地のものを買うようになり、今ではそれが自分の中では当たり前になっています。今の自分が被災地のためにできることはそんな些細なことかもしれませんが、これからもずっと続けていこうと思っています。@ta_mina

IPUで被災地支援、1年たった今だからできること。つながりながら現地に行き続けること。一人の力は小さいけどみんな協力したら継続して何かできると思う。いろんなグループが仮設住宅の訪問などして、仲間や後輩に引き継いで広がっていったら良いと思う。@aritnb

ボランティアに行きたいと思っても、少し敷居が高いと思っている人たちに「被災地見学ツアー」を実施したい。被災地を見学し、現状をしりながら、ボランティアを含めて、「今できること」を考える。@ecchomas

被災地産をできるだけ買い物をすること。できれば現地で買うことだと思います。それと、同じ岩手にいる私たちが他県の人にそれをどんどん送ったらいいと思います。小さい子供達なら微笑みが被災地の方々の大きな力になるでしょうし、大人は街を正常に戻す手助けができればと思います。具体的に行動するには、やはりお金！集まった募金等は裏表なく被災地の方々に届いているのかとか、金融機関での門前払いも、やめてもらって、事業計画が良い物ならば融資しておいて欲しいし、言い出すとキリがないのですが、すべての方が潤うようなお金の使い方をすることかなと思いました。@etsu_etsu_etsu

元気な人は、どんどん県外の人とふれあい、情報を発信し続ける！まだまだ被災地は倒壊した建物の取り壊しさえできていない状態なのに報道される機会が減ってきたので、あの悲劇を忘れないように、一人でも多くの人に情報を発信していく必要があると思う。@yuko311

Comment

誰かが苦しんでいても気に留めないで生きてゆくことも可能です。では、そのままではいけないなら、どうすべきか、皆さんから「自分のできることをやる」という答えをいただきたいと思います。カッキー'sの活動も同じです。私たちも自ら学ばせていただきつつ住民の方々の力を引き出すようなかわりを続けたいと思います。

看護師・保健師・健康心理士 井上 都之 (看護学部講師)

現地に行ったことがある人を中心に情報を発信していくこと。私たちが誰が対象になっているかにもよりますが。@namasaya_kohei

それと、同じ岩手にいる私たちが他県の人にそれをどんどん送ったらいいと思います。@mstkkdo

Twitterとfacebookで東北のコトを発信。復興支援的なものを通販で買ったり、この前は石川県の福祉作業所で相馬の作業所で制作したものを買ったり。昨年はいわき、燧ヶ岳、会津行ったけど、今年も東北のどっかには行ければと…。@HappyGOODtoy

【特集に関するアイデア・ツイートの流れ】 twitter

- 1 公式アカウントで「お題」を確認
- 2 twitterにアイデアをツイート
- 3 投稿アイデアが次号誌面に掲載

※ツイートの際には、文末に「#ipumag(発行号数)」を付記してください。「発行号数」は、本号では「52」、次号では「53」と変化しますので、「#ipumag52」「#ipumag53」のように表記してください。このことにより、様々なアイデア・ご意見を内容別にグループ化でき、誌面へ反映することができます。ご協力をお願い致します。 ※皆様からのツイートは、本誌などで掲載させていただく予定です。ただし、誌面の都合により、全てを掲載することができない場合がありますのでご了承ください。

次回の「お題(テーマ)」はツイッター上で発表します。一般の皆様、学生・教職員の皆様からのツイートを広く募集しています。たくさんのアイデアお待ちしております！



岩手県立博物館の「取蔵庫」見学で、貴重な資料や文化財に触れる学生たち。いわて学を通じて岩手の歴史をつづけてきた文化財を守ることの重要性を知るとも大切な学びだ。

岩手県立大学が取り組む「災害復興教育」

学生の心に復興への思いを育み、 新たないわてを創る人材育成を。

震災以来、教育・研究活動やボランティアなどを通し、様々な支援活動を展開してきた岩手県立大学。息の長い支援のため、復興の礎となる人材育成をするために、復興に関わる講義や実習、研究への参加など、様々な活動を「災害復興教育」に位置づけ、学生の意識と経験を高める取り組みが始まっています。

復興に活きる教育・研究で、 地域を支える人材を。



「災害復興教育を通じて人材育成に力を入れていきたい」と話す、中村慶久学長。



学芸員による講義では、スライドを使って文化財レスキューの説明が行われた。



博物館のバックヤードである「取蔵庫」を見学。資料等を見せながら、文化財の説明をする学芸員。



「総合政策入門」では住民が参加しながら合意形成する過程を学び、学生も積極的に参加していた。

<災害復興教育の取り組み>

地域に密着した実践教育と、学生の主体的な活動を支援しながら、将来の復興を支える人材を育成します。

取り組み例1

【総合政策入門】(総合政策学部)
震災後の自治体の状況と問題把握、震災に対する行政の対応、住民参加と合意形成など、学部所属の教員が持つ専門性と防災・復興研究の実践を基礎に、毎回様々な観点から震災を考察する授業を展開。複数の講師による講義、ワークショップ体験やグループ討論を通して、学生が自身の問題として考えることができ、実践的な行動へつなげることを目指す。

取り組み例2

【基礎研究】(宮古短期大学部)
キャンパスのある宮古地区の地元産業での見学・研修を通じ、学生たちが被災状況と復興に向けた取り組みの状況を知り、地元産業が就職先として目を向けられるようにするとともに、被災地の地域社会・地域経済の復興に貢献できる人材を育成する。学部として主体的に取り組んでいくことで、より地域に密着した研究・教育体制の構築を目指す。

取り組み例3

【いわて学】(いわて高等教育コンソーシアム・岩手県内5大学連携)
県内5大学の連携による共通授業。「三陸から知るいわて」～いわての復興を考える～をテーマに、三陸地方の自然、歴史や文化を核としながら、いわての復興について考える。また、被災地となった宮古市と田野畑村へ実際に足を運び、学生自身が現状を知ること、主体的に学ぶ姿勢を育てる。

「いわて学」に参加した学生・学芸員の声

【参加学生から】

澤田 崇弘さん(岩手県立大学社会福祉学部・1年)
高校時代から震災ボランティアとして活動していることもあり、もともと「復興」について学びたいと思って受講しました。「いわて学」では被災地だけでなく、復興という視点から幅広く岩手のことを学べるのが魅力。私は岩手のことが大好きなので、いろいろ勉強になりますね。



【学芸員から】

佐々木 勝宏さん(岩手県立博物館主任専門学芸員)
当博物館では、学芸員全員が文化財レスキューとして活動。そのため経験談も交えながら熱のこもった講義を行いました。学生たちには講義を通じ、少しでも文化財に興味を持ち、これを守ることの重要性を理解してほしい。修復ボランティアにも積極的に参加してほしいと思います。



上記以外にも、様々な講義や活動を災害復興教育に位置づけ、取り組んでまいります。

復興への長い道のりを歩み出した岩手にとって、何より重要となるのは復興を担う人材です。被災地にある大学として人材育成を牽引していくのは岩手県立大学の大切な務め。学生の意識を高め、復興に活きる教育・研究を展開する動きが始まっています。「大切なのは、まず知ること。被災地を自分の目で見て、感じたことから関わり方が見えてくるはず。それだけが課題を持って考えていくためにも「復興」をテーマや課題として、積極的に授業や研究に取り入れ、学生に考える場、行動できる場を与える。生きた学問が大事です」と、中村慶久学長は災害復興教育への思いを語ります。

ひとりひとりが問題を共有し 復興への意識を高める。

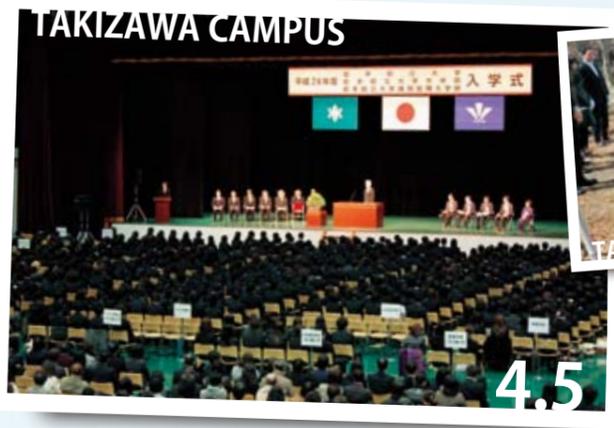
県立大学が主務校の、県内5大学連携「いわて高等教育コンソーシアム」

具体的には、復興をテーマとした講義や実習、地域や産業支援につながる研究、ボランティアなどの課外活動まで、直接的間接的なものを含め幅広く「災害復興教育」の枠組みの中に入れて、それらの学生生活4年間の積み重ねによって復興への知識と思いを深め、地域を支える人材を育成していくこととしています。「ただ元に戻すのではなく、これまでに以上の岩手を創っていくことが真の復興であり、大切なこと」と、中村学長は強調します。

今年度は「三陸から知るいわて」をテーマに、三陸地方を核としながら地域特性を知り、「いわて」の魅力や復興について考えることを目的とした授業を行っています。6月2日には岩手県立博物館で、津波で破損した文化財を修復する文化財レスキューについてのレクチャーを開催。5大学の学生61名が参加し、修復に取り組んだ学芸員を講師に、現地の文化財の状況や修復の取り組みなどについて学びました。

講義を通じ、津波で破壊された博物館や塩害によって損傷し、劣化が進む文化財の写真などを目にして、学生たちは改めて被害の大きさを実感。三陸地方の博物館が所蔵するコレ

クシヨンの価値や、文化財を守る重要性についても理解を深めていました。そのほか、総合政策学部で開講されている「総合政策入門」では、今年度のテーマを「震災後の地域再生・復興」とし、総合的アプローチにより復興を自らの問題として捉え、解決のための実践的な知識や体験を身につける内容としており、さらに被災地沿岸にある宮古短期大学部では「基礎研究」の授業内で、宮古地区の製造業・水産業の経営者などから被災状況と復興に向けた取り組み等についてレクチャーを受ける研修を盛り込んでいます。このほかにも、学生ひとりひとりが課題を共有し、復興への意識を高め、課題を解決できる能力を身につけることができる機会を設けていきます。



滝沢、宮古それぞれの入学式と復興祈念植樹

4月4日には宮古短期大学部、翌5日には岩手県立大学、大学院及び盛岡短期大学部の入学式をそれぞれのキャンパスで行ない、ご来賓や保護者の方々の見守る中、両キャンパスあわせて745名の新入生が岩手県立大学での学生生活をスタートさせました。昨年度は東日本大震災のため開催が見送られ、2年ぶりの入学式。学生・教職員ともに感慨深いものとなりました。入学式に合わせ、東日本大震災大津波で亡くなられた方々のご冥福と、一日も早い被災地の復興を願い、宮古キャンパスでは祈念碑の設置と祈念植樹を、滝沢キャンパスでは祈念植樹を行いました。



「大規模停電時等における臨時避難所としての使用に関する協定」を締結

3月27日、大学の相澤徹理事長と滝沢村の柳村典秀村長が、「大規模停電時等における臨時避難所としての使用に関する協定」への調印を行いました。大規模停電時などにより村の指定した避難所が使用できない場合に、本学施設の一部を滝沢村が臨時避難所として開設、使用することについての協定です。平成23年3月11日に発生した東日本大震災時に地域住民の方々の本学への避難があったことを踏まえ、本学の地域貢献の一環として、大規模停電時等における臨時避難所としての使用を認めるとともに、同様の災害が発生した場合の同村との連携による円滑な対応を確保するため締結したものです。



「復興祈念演奏会」NYで開催、復興への想いを歌声に乗せて

3月28日、ニューヨーク市のリンカーンセンターで「Hand in Hand」主催の復興祈念演奏会NY公演が開催され、本学から混声合唱団Polishが参加。「Hand in Hand」は復興支援の継続や支援に対する感謝の意を伝えることを目的とし、コンサートを開催しているプロジェクトです。Polishはプロジェクトの理念に共感し、今回の参加を決意。また東北福祉大学混声合唱団やMJCアンサンブル(中・高校生グループ)も参加。代表の宮本さんは「実際に音楽、合唱を通じて言葉や年齢を越えて復興支援への感謝を伝えられた」と語っていました。(出版委員会A・T)



新入生歓迎会を通して大学で「やりたいこと」を探す

4月7日、中央委員会主催の新入生歓迎会が開催され、様々なサークル、委員会、学部自治会などが参加。体育棟アリーナではピラ配りやブースを設けて活動紹介を行い、学生ホール棟ではダンスや合唱などの発表を行いました。各会場・ブースで盛り上がりを見せていて、在校生も新入生も楽しそうな雰囲気が伝わってきました。本イベントを通じてこれからの大学生活をどう過ごすか、新入生にとって「やりたいこと」を探すきっかけになったようです。(出版委員会A・T)



平成23年度優秀学生賞表彰式を開催しました

平成23年度優秀学生賞が、看護・社会福祉・ソフトウェア情報・総合政策学部から各3名、盛岡短期大学部・宮古短期大学部から各1名、一年間の学生生活で特に優れた学業成績を取った14名に授与されました。表彰式は4月26日に滝沢キャンパスにて、5月10日には宮古キャンパスにて実施。受賞者には表彰状と盾、副賞として図書カードが贈呈されました。学長からはお祝いの言葉と、学生生活のすべてを学ぶ場と意識し、人間としてより大きく成長してほしいとの想いが伝えられました。



いわての復興を願い、歌でみんなの心をひとつに

4月8日にイオンスーパーセンター盛岡浜民店で復興支援イベントが開催され、本学からは復興girls&boysとアカバラサークルJelly Beansの2団体が参加しました。Jelly Beansが歌い終わった後には、たくさんの温かい拍手が起こり、聴いてくださった方々に笑顔があふれました。イベントに参加したJelly Beansの鈴木佐和子さんは「震災直後からアカバラで人々を元気にできないかという想いを抱いていました。歌を聴いてくれた多くの方が一人でも元気になるのであれば幸いです」と、話していました。(出版委員会N・W)



各学部のチームワークに歓声、体育祭がにぎやかに開催

5月12日に、本学アリーナにて第4回体育祭が開催されました。岩手県立大学、盛岡短期大学部、宮古短期大学部から、約150名が参加。各大学・学部に分かれ、玉入れ・綱引き・長縄跳び・二人三脚リレーの4競技で勝敗を競いました。特に長縄跳びと障害物競走では白熱した競技に歓声が上がリ、昨年に勝る盛り上がりを見せました。また、有志による鬼ごっこ・障害物競走では、大学や学部の壁を超えて力を合わせ、交流を深めました。最終的には看護学部が優勝、図書カードが贈呈されました。(出版委員会T・Y)

※イニシャルを明示している記事は、出版委員会の学生が取材・執筆したものです。

I P U T O P I C S

岩手県立大学のニュースやイベントなど、旬のトピックスをご紹介します。

人事異動情報

平成24年3月31日付 転出・退職

商工労働観光部/産業経済交流課/総括課長(前 教育研究支援室長兼地域連携室長)	宇部 眞一
沿岸広域振興局/経営企画部/企画推進課長兼復興推進課長(前 学生支援室/副参事兼学生支援課長)	高橋 一教
環境生活部/資源循環推進課/主幹兼資源循環担当課長(前 企画室/総務課課長)	山崎 隆
農林水産部/農林水産企画室/主任主査(前 企画室/主幹)	千田 雅彦
総務部/総務事務センター/主任主査(前 教育研究支援室/主幹)	阿部 大作
環境生活部/青少年・男女共同参画課/主査(前 教育研究支援室/主査)	二宮 美紀
県南広域振興局/経営企画部/主査(前 学生支援室/主査)	中村 健二
政策地域部/調査統計課/主任(前 企画室/主査)	安達 さおり
沿岸広域振興局/経営企画部/主査(前 教育研究支援室/主査)	藤根 由紀子
県北広域振興局/経営企画部/二戸地域振興センター/主任(前 企画室/主査)	高家 佳織
保健福祉部/医療推進課/主任(前 企画室/主事)	小原 哲也
出納局/出納指導監管理課長(前 宮古事務局/事務局長)	田村 幸義
保健福祉部/岩手県宮古児童相談所/主任相談調査員(前 宮古事務局/主査)	盛合 恵子
退職(前 学生支援室/特命課長)	川原 利夫
退職(前 企画室/主事)	畠山 未来
退職(前 宮古事務局/就職支援専門員)	宇都宮 満

平成24年3月1日付 採用

宮古事務局/就職支援専門員(新採用)	吉永 誠
--------------------	------

平成24年4月1日付転入・採用

教育研究支援室長兼地域連携室長(前 県南広域振興局/総務部/一関総務センター/所長)	鈴木 清也
企画室/総務財務課長(前 総務部/岩手県東京事務所/総務行政部副部長)	菊池 茂
学生支援室/学生支援課長(前 政策地域部/政策推進室/特命課長)	上和野 里美
企画室/主幹(前 企業局/経営総務室/主任主査)	藤原 典光
教育研究支援室/主幹(前 環境生活部/県民くらしの安全課/主任主査)	昆 英子
教育研究支援室/主幹(前 県北広域振興局/農政部/二戸農林振興センター/主任主査)	古里 清孝
学生支援室/主査(前 農林水産部/流通課/主事)	中村 淳一
企画室/主査(前 医療局/職員課/主任)	佐々木 昭子
教育研究支援室/主査(前 岩手県議会事務局/総務課/主任)	佐々木 こそえ
企画室/主事(前 岩手県教育委員会事務局/教職員課/主事)	苅敷山 義則
宮古事務局/事務局長(前 岩手県教育委員会/岩手県立図書館/副館長)	稲森 雅夫
宮古事務局/主査(前 県南広域振興局/保健福祉環境部/主任)	菊池 理香
学生支援室/特命課長(前 岩手県教育委員会/岩手県立図書館/館長)	酒井 久美子
教育研究支援室/主事(新採用)	権谷 麻美
学生支援室/主事(新採用)	松本 唯美
地域連携室/コーディネーター(新採用)	上野山 英克
企画室/主事(新採用)	大橋 健介
企画室/主事(新採用)	熊谷 愛
宮古事務局/主事(新採用)	和山 瑞恵
宮古事務局/養護専門員(新採用)	田中 麻美子
平成24年5月1日付採用	
企画室/主事(新採用)	松橋 亜希子

平成24年度岩手県立大学公開講座(滝沢キャンパス講座)

本学では開学以来、大学の教育・研究の成果を還元し、地域社会の発展に貢献することを目的として、公開講座を開講しています。震災から一年の今、いわての未来の希望、展望を持つきっかけにいただければと考えております。どなたでもご参加いただけますので、ご家族、ご友人などお誘いあわせてお気軽にご参加ください。

7月7日(土) ■ 講座1	13:15~15:15	被災者支援活動から見えてきたこと-復興と女性の力-	講師:平賀 圭子氏(NPO法人参画プランニング・いわて理事長)	
7月21日(土) ■ 講座2	10:00~12:00	意識調査から考える復興への課題-「復興に関する大船渡市民の意識調査」より-	講師:阿部 晃士(総合政策学部准教授)	
	■ 講座3	13:15~15:15	在宅療養者の震災被害実態から考える地域防災のあり方	講師:上林 美保子(看護学部教授)
7月28日(土) ■ 講座4	10:00~12:00	コミュニティは震災にどう対応したか-初動から復興計画づくりに至る道のりから見えてきたこと-	講師:吉野 英岐(総合政策学部教授)	
	■ 講座5	13:15~15:15	被災後の高齢者の新たな住まい方	講師:宮城 好郎(社会福祉学部教授)
9月8日(土) ■ 講座6	10:00~12:00	産業経済の復興と従業員のメンタルヘルス-明日を創る心の復興とは-	講師:青木 慎一郎(社会福祉学部教授)	
	■ 講座7	13:15~15:15	震災下の被災者における食の意識変化を探り、岩手県民の今後の食生活の方向性をデザインする試み-イメージMAP法を用いて-	講師:乙木 隆子(盛岡短期大学部准教授)
9月29日(土) ■ 講座8	13:00~15:00	震災復興と地域産業(仮題)	講師:佐藤 日出海氏(宮古市産業振興部部長) *パネルディスカッション<テーマ>震災復興と地域産業	

※講師・タイトルは変更となる場合がありますのでご了承ください。

地域をつくる 希望の星たち

「好き」だから、夢中で頑張れる。
それって一番幸せなことじゃないですか。



卒業生

鹿糠 亜裕美 「フリーライター」

1983年葛巻町生まれ。県立葛巻高校卒業。大学時代は佐藤利明教授のゼミに所属し、卒業研究として二戸市足沢地区の生活改善グループの活動調査・分析に取り組み。また、大学3年のときは、楽天イーグルスのボールガールのアルバイトにも挑戦。そこからつながった縁が今でも続き、野球観戦をより楽しくしてくれているという。

故郷の力になるために、地域づくりを勉強したい。そんな志を抱いて、岩手県立大学の総合政策学部に進学しました。大学では地域コースに所属し、農山村の活性化を研究。その一方で野球部のマネージャーを務め、4年間、野球に熱中しました。

地域づくりと野球、私にとってはどちらも大切なもの。就活のときも、野球関係の仕事に就くか公務員として地域に関わるべきか悩みました。でも、やっぱり好きな道に進もうと、楽天イーグルスの情報をWEBで発信する仕事に就いたんです。仙台で働いたのは1年間でしたが、この仕事を通して、文章を書くこと、伝えることの面白さを実感。ライターへの歩を踏み出しました。

現在は、「スタンダード」という岩手のスポーツ情報誌で、編集取材を担当。県内各地の学校や大会を回り、中高生を中心に取材をしています。得意とするのは大学社会人野球なのですが、中高生のひたむきな姿を自分の手で残すことは特別な思い入れがあります。彼らが私の記事を読むたびに、輝いていた瞬間を思い出してくれたら、嬉しいですね。

ライターを始めて、まだ5年。日々締切りに追われ、大変なことも多いのですが、この仕事が「好き」だから、どんなことでも頑張れます。もっともっと上を目指して、これまでお世話になった方々に認められるものを一つでも多く書いていきたいですね。

地域貢献を使命の一つに掲げる
岩手県立大学。
学習や研究に励みながら
地域に役立つ力を磨く在学生と、
仕事を通じて
地域づくりに関わる卒業生、
それぞれの熱い思いを
紹介します。



在学生

小井田 康明 「宮古短期大学部経営情報学科
情報科学分野2年」

1992年九戸村生まれ。県立伊保内高校卒業。父と兄が神楽をやっていたため、小学3年生から「江刺家神楽」を習い始める。高校文化祭では舞を披露した際に浴びた喝采と、観客の温かい拍手に感銘を受けた。好きな言葉は「成せば成る」。

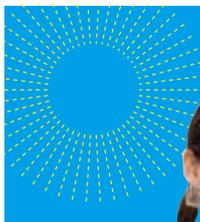
もともと経営と情報分野に興味があり、酪農や養鶏を中心とした農業を営んでいる実家の仕事にもこれらの事を役立てることができるとはどの思いから、宮古短期大学部へ進学を決めました。中でも情報分野の講義に特に興味を持って取り組んでいます。プログラミングは自分で形をつくっていく過程がすごく面白い。うまくいかず原因究明に苦労する場面もありますが、思い通りにいったときは大きな達成感を感じます。大学は少人数制ということもあって、先生と学生の距離が近いのが魅力。私は情報科学のゼミに所属しているのですが、卒業研究ではコンピュータグラフィックスのプログラミングなども挑戦してみたいと考えています。

また、学業とは別に、幼いころから地元九戸村の郷土芸能である「江刺家神楽」の継承活動にも携わっています。今も神楽を続けていますが、私たちが若い世代には、地域の伝統を後世に伝える責任があると感じています。何か短期大学部で学んだ事を郷土芸能の普及や継承に役立てる事ができないかと考えています。

将来は情報系の企業で働きながら様々な経験を積み、なんらかの形で家業や地元の郷土芸能もサポートできるようにになりたい、いずれは故郷のために働きたいと思っています。

学んだ技術を神楽の伝承に活かす、
故郷の支えになることが私の夢です。






甲斐谷望の アイーナ学ばろ!



「岩手県立大学アイーナキャンパス」は、
県民の皆さんが大学の授業や講座に
参加できるサテライトキャンパス。
専門的な知識はもちろん、
暮らしや健康に役立つ知識など、
内容も盛りだくさん。
本学卒業生でIBCアナウンサーの
甲斐谷望さんが、
講座の様子をリポートします。

甲斐谷 望さん

岩手県立大学盛岡短期大学部 平成24年度公開講座
今回の講座  **「Cultural Studies」**

この講座は、アメリカ文化と日本文化を英語でレクチャーする講座です。
具体的には、アメリカの食文化と言語の両面からアメリカ文化にアプローチする講義と、
古代出雲の歴史的意義やイメージを講義する2つの内容で構成。
今回は「アメリカの食文化」について楽しい講義が行われました。

講座スケジュール

7月

【いわて善隣塾】

- 中国語を楽しむ講座【11日(水)】
- パソコンステップアップ講座【18日(水)】
- 百人一首を楽しむ講座【25日(水)】

【IPU情報システム塾】

- Webクライアントプログラミング入門コース【14日(土)】

8月

【いわて善隣塾】

- 中国語を楽しむ講座【8日(水)】
- 百人一首を楽しむ講座【22日(水)】
- パソコンステップアップ講座【22日(水)】

【IPU情報システム塾】

- Webクライアントプログラミング入門コース【25日(土)】

9月

【いわて善隣塾】

- 中国語を楽しむ講座【5日(水)】
- パソコンステップアップ講座【19日(水)】
- 百人一首を楽しむ講座【26日(水)】

【IPU情報システム塾】

- Webクライアントプログラミング入門コース【15日(土)】

※以上の講座の他に、【不妊・遺伝相談】【赤ちゃん相談室】【高齢者健康相談】【生活習慣病療養相談】を、定期的に開催しています。
※講座の詳細、お問い合わせについてはホームページでご確認ください。

岩手県立大学アイーナキャンパス

検索 



スタート!

今回の講義はすべて英語。先住民と移民の食文化の比較、食品産業や流通の発達の歩みなど「アメリカの食文化」の歴史をさかのぼります。

先住民の食に対する
豊かな知識と
技術に
びっくり!



先住民はなにを食べていたのか、給食はどのように始まったのかなど、興味深いお話がいろいろ飛び出します。

【岩手県立大学アイーナキャンパス】
いわて県民情報交流センター(アイーナ)7階〒020-0045 盛岡市盛岡駅西通1-7-1 tel.019-606-1770



講師は盛岡短期大学部国際文化学科のクリスティン・ウィンスカウスキー先生。時折ユーモアを交えながら講義を進行。

すべて英語の
授業って
おもしろそう。



高校生から熟年世代まで、受講者は様々。先生のわかりやすい英語に導かれて、熱心に耳を傾けます。

海外経験豊富な講師が
解説する日米文化、
興味深い内容が
いっぱいですよ。



1時間半の講義はあつという間で、最後は時間が足りず少々延長。充実した内容に受講者も大満足でした。



先生の楽しいお話に思わず笑顔。受講者の皆さんはヒアリングもバッチリの様子。

「甲斐谷望のアイーナで学ぼう!」は今号で終了となります。1年間ご覧いただきましてありがとうございました。次号からは新しい企画がスタート。県立大学の隠れた魅力をご紹介しますので、ぜひご期待ください!

編集後記

4月に、2年ぶりの入学式を滝沢・宮古の両キャンパスで行ないました。新入学生の皆さんをお祝いしながらも、このような行事が開催できることは「当たり前」のことでは無い」ということに、改めて想いをめぐらせました。日常を取り戻しつつある地域がある一方、未だに先の長い復興の道への歩み始めたばかりの被災地の現状があります。災害復興教育の中で学生はもちろん、私たち職員も常に意識を高めていく必要があると思います。(企画室 T.S.)

今年で第四回目となる体育祭は悪天候のため屋内での実施となりましたが、各学部の学生はもちろんのこと盛岡短大や宮古短大の学生から教員、職員の方々まで多くの人が参加しました。宮古短大の学生が滝沢キャンパスで一緒に参加できる数少ないイベントとして、体育祭は貴重な時間になりました。普段なかなか交わる機会がないため学部同士の壁は高いものを感じられますが、スポーツで共に汗を流し交流を深めることができたのではないのでしょうか。学部同士の連携をこれからも大切にしたいですね。(出版委員会 T.V.)

お昼休みや放課後になると8月に行われるさんさ踊りに向けた練習が行われ、笛や大鼓の音色が構内に響き渡っています。本学では5月に行われた体育祭を始め、7月に毎年恒例となっている七夕祭が行われるなど、夏休み前には楽しいイベントがありますが、それが終われば前期試験。新入生にとっては入学後初めての試験ですが、空き時間には勉強に励む姿が見られます。大学生生活を楽しみなながらも学生の本分を忘れずに、時間を有効活用して頑張っています。(出版委員会 N.W.)



岩手県立大学 企画室 協力:岩手県立大学出版委員会
Iwate Prefectural University

〒020-0193 岩手県岩手郡滝沢村滝沢字菓子152-52
TEL.019-694-2000 FAX.019-694-2001
【URL】http://www.iwate-pu.ac.jp/
【e-mail】management@ml.iwate-pu.ac.jp 発行:2012年6月30日